



イイケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 606 回 許すには、「善悪」を手放すこと

2014.12.7

時節柄「政治討論」やらで、意見交換をするシーンを良く見かけるようになった。野党や評論家はその役割上、与党の批判を繰り返す。与党の失政を追求するのに終始し、自らの政策か全く伝わってこない「反対屋」だとしたら、有権者に舐められても仕方がない。日常的なビジネスの場面でも、このような例は往々にして存在する。上司が意味不明な言葉を連呼し、一方的に部下を叱責するとする。著しく、その部下の業績が向上する事実は全くなく、これも部下から舐められる結果に終わることが多い。

まず、相手を批判することから始まる。その第一声は、「いや、そうではない」、「どう責任をとるのか」…こんな言葉が発せられる。相手の意見を否定することから、会話が始まるとしたら、最初から拒否反応を示すことで、理解し合う前提は全くない。当人同士はもちろん、聞いている周りも楽しくない。どうもギグシャグしすぎて、コミュニケーションがうまくいかない。いや、コミュニケーションになっていないのかもしれない。

どうして、そう、なってしまうのだろうか？

たぶん、**相手を理解し、認め、「許す」ことの欠如**が原因だと仮定してみた。

そうだとすれば最初の言葉は「いや、違う」ではなく「**Yes, sir Bat**」になるはずである。そして、相手を「許す」ためには、自分の「善悪」という概念を捨てる必要があるということだ。「善悪」や「正しさ」とらわれると、私たちは人を許すことができない。自分よりも相手の方が「間違っている」あるいは「悪い」ように見えるからだ。概念としての「正しさ」とは、人が100人いたら100通りの正しさがあるはず、逆に言えば、客観的な「正しさ」は存在しないともいえるのである。

許すには、「善悪」を手放すことが大切だと考えてみた。

「正しさ」に固執すると戦いが起きる。

国どうしの戦争も、「正しさ」と「正しさ」の戦いである事、史実が語っている。

「何が正しいか」を考えると、人を許すことができなくなる。

「何が正しいか」を考えるのはやめ、「何が楽しいか」を考えること、これがコミュニケーションの巧みな術(すべ)となる。

「何が楽しいか」で考えてみると、人を許すのと許さないのと、「どっちが楽しいでしょうか？」という回答が明確になってくる。許すことで、自分の人生が楽しくなるのである。

会話や、意見交換が自己主張の場であると信じ込んでいる人が多くなった。それが相手の尊厳を無視して一方的である場合、心と心が触れ合うコミュニケーションなど、あり得っこない。円滑な、人間らしいコミュニケーション形成のために、時には、「正しさ」を手放す勇気を持ちたいものだと感じる、今日この頃である。